羅　臼　岳	標高
らうすだけ	1660　m

登　り	4:40	8:35
山　頂	0:20	
下　り	3:35	

▲▲ 羅臼岳〔岩尾別コース 〕▲▲

９月１０日曇り気温１７度、前日までの冷たい雨も上がり季節が秋に変わりはじめた知床キャンプ場の朝は漁船のエンジン音が目覚まし代わり、夏の暑さで少し減った体重に気を良くしたメタボ隊員は同僚隊員と二人オホーツクの秀峰羅臼岳へと向かいました。

海岸に並ぶサケ釣りの竿を横目に登山口の岩尾別温泉を目指しますが行く手はエゾシカのサファリパーク状態、車や人を恐れることなく道端の草を食べ尽くす勢い、昨夜ウトロ野営場のテント周りも数頭の群れがバリバリと芝生を食べる音が聞こえていましたが、観光客には人気でもドヤ顔で近づいてくる野生動物は奇異に感じます。

目的の羅臼岳山頂は雲に隠れて見えませんが人気の百名山とあって少ない駐車スペースは既に一杯、崩れそうな崖下に路駐しホテル地の涯の脇を抜け木下小屋から登り始めます。

天候の回復を期待しながら九十九折れを繰り返し尾根に出るとオホーツクの海岸が弓なりに続き山側に目を転じると山頂はやっぱり雲の中、６５０ｍ岩峰を横切りシラカバの林を進むと弥三吉水ですが周囲にはチョコボールの様なエゾシカの糞が散乱し、獣臭もすごかったので先に進み頭上の枝が開けて来ると名前どおりの極楽平、ここで一息入れているとご年配のにぎやかなグループが追い越して行きました。

いつもの「カメの歩み」で銀冷水を過ぎると霧が湧き出し、途中下山してきた方の情報によると大沢から上は強風で霧雨が叩きつけ厳しいらしくへっぽこ登山隊としては悩むところですが、とりあえず羅臼平まで進んでから判断することにし先へ進むと、大沢の入口で早くも風が強まってきたので雨具を着込み軽食で腹ごしらえ、踏み出したとたんに鮮度抜群「山の主」の御印に遭遇、傍らには小サイズもあり親子連れのようなのでお守りスプレーを実戦配備し会話のボリュームを上げて進みます。

大沢後半の岩場から風が強まり霧雨が吹き付け羅臼平のフードコンテナを過ぎるまでひたすら足元を見つめて進み、ハイマツの中に潜り込み風を避けて様子を伺いながら岩清水まで前進することにします。

進むにつれ次第に風は弱まり視線の先にはコケ生した岸壁から糸のように流れる至福の一滴、岩清水からは風下に回り込む形でさらに風が弱まり山頂を目指すことに、スポーツジェルやナッツでエネルギーを補給し一枚多く着込んで岩場を登り始めます。

霧の中岩肌に黄色く塗られた矢印は心強く、視界が利かないお陰で高さへの恐怖感はさほどなく快調に高度を上げて行くと、年配の方が連なり２０人ほど下ってきますがあまり笑顔もなく無言、続いて途中追い越して行ったにぎやかグループもさすがに口数少なく続いて来ました。

大集団が通り過ぎるまで岩場に張り付いて遣り過ごし、入れ替わって岩の間を這いずり山頂に到着しましたが予想通り強烈な風が霧雨をレ

ンズに吹きつける中で山頂標識と写真を撮り速攻引き返し、直下の岩陰でしばし身を潜め天気の回復を待ちますが15分ほどであきらめ岩場を撤退、途中で昼食を摂っているにぎやかグループの脇を抜け岩清水から晴れ間を目がけて一気に下りることにします。

来た時より雨も風も強まり濡れた大沢を慎重に下り、風が収まった銀冷水で小休止、さらに極楽平まで進んでやっと霧雨も上り明るさがましてきたので長目の休憩をしているとまたもやにぎやかグループが追い越して行きますが、先程よりさらに口数も減り最後尾の二人は集団から遅れついて行くのがやっとの様子、悲壮感が漂っていました。

結局、雲に隠れたままの山頂を背に重い腰を揚げ普段より速いペースで登山口に着くとにぎやかグループの先頭がツアーガイドの社名入ワゴンに乗り込むところでした。

同僚隊員が駐車場の端に「露天風呂」の看板を見つけ喜々として行ってみると、混浴が三段しかも無料で入れるらしくさっそく感謝しながら汗を流して駐車場に戻ると大型観光バスをホテルの方がお見送り、なぜかバスの中からこちらにも手を振っているので手を振り返すとなんと先程までデットヒートを繰り広げたにぎやかグループが、百名山を巡る弾丸登山ツアーだったのですねぇ、バスの出発時刻に追われるツアー登山は今も健在らしく、帰り道振で返ると晴れ渡った空に羅臼岳が山頂までスッキリと姿を現していました。